

Ⅲ 令和元年度 第 22 回研究大会

第22回宮崎県特別支援教育研究連合研究大会

1 大会概要

- (1) 大会主題 「自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに応える特別支援教育」
(2) 期 日 令和元年7月26日(金) 午前9時40分～午後3時30分
(3) 場所(会場) 門川町総合文化会館 宮崎県東臼杵郡門川町南町6丁目1番地

2 内 容

- (1) 目 的 特別支援学校及び特別支援学級設置校相互の連絡・連携を緊密にするとともに、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育のあり方を求め、今後の解決すべき課題を検討し、会員相互の資質の向上と本県特別支援教育の充実・発展に資する。

- (2) 日 程

9:20 9:40 10:00 11:40 12:00 13:00 15:20 15:30

受付	開会 行事	研究発表 質疑・応答	指導 講評	昼食・休憩 (教材・作品展)	講 演	閉会 行事
----	----------	---------------	----------	-------------------	-----	----------

- (3) 参加者 合計 437名(当日集計)

小学校	中学校	高等学 校	特別支援 学校	ひまわり 支援学校	幼稚園	発表者	来賓	合計 (7月集計)
239	41	4	93	43	1	3	8	432

来賓 役員	県北	日向・ 東臼杵	児湯	宮崎	都北	南 那 珂	午後 受付	ひまわ り支援	発表 者	合計 (当日集計)
15	67	106	27	68	45	12	51	43	3	437

3 報 告

- (1) 研究発表

- ① 「児童の問題行動の低減を目指した実践的研究」

日向市立日知屋東小学校 佐藤 基樹 教諭

児童の問題行動に対して、MASチェックリスト評価を用いて行動の機能分析を行なって対応していった結果、問題行動は次第に減っていき、消去することに成功したという実践を以下の内容を中心に報告した。

○機能分析の理論(応用行動分析、機能分析、問題行動の4つの機能、MASチェックリスト評価、MAS集計結果、問題行動への2つの対応法、チャートシートの作成)

○機能分析を用いた実践1、実践2

望ましい行動を身に付けさせる前に、児童の気持ちや感情を受け入れ、信頼関係を

築いた上で、行動の機能（意味）を分析し代替行動へ置き換えていった。MASチェックリスト評価を行なうことによって、教師の主観や憶測ではなく、客観的に問題行動の機能を仮定することができ、行動の機能に合った対応を行なったので問題行動の消去や低減が見られた。また、日頃の観察だけでは、どのような状況で問題行動が起きたのか等、忘れてしまうことがあるため記録が大切になってくる。記録をする際には、「日付」「体調」「時間」「場所」「場面」「相手」「問題行動が起きたきっかけ」「問題行動」「教師の応じ方」「結果」を記録しておくようにした。これによって、MASチェックリスト評価が行いやすかったという点もあり、日頃の観察記録は欠かせないことも明らかになった。

② 「中山間地域の特別支援教育」

東臼杵郡美郷町立美郷北学園 蒲生 紗千代 教諭

面積の92%が山林で、人口5000人、小中学生260人の中山間地域である美郷町に住む子どもたちへ行ってきた特別支援教育を振り返ることで、今後の特別支援教育のより一層の充実・発展につなげたいとの報告だった。町教育委員会が、平成26年4月に町独自の通級指導教室2教室を美郷町立田代小学校に設置した。

町教委が設置した2教室は、ことばの教室「スマイル教室」と学習・生活指導「チャレンジ教室」で、巡回型の通級指導教室として町全体に出向き指導を行ったため、児童や保護者が日向市や延岡市へ通わなくてよくなった。さらにその3年後、県の通級指導教室が、ことばの教室「きらら教室」として設置され、現在は美郷町だけでなく諸塚村への巡回指導が可能となった。

美郷町の通級指導教室の歴史と現状、さらに指導の実際や、担任・保護者とのよりよい連携の方法や成果（児童・保護者・担任のコメント）について紹介した。

また、特別支援教育について啓発するための町独自のリーフレットが配布され、就学前から卒業後までをつなぐ美郷町の取り組みや、中山間部であっても各関係機関との連携を推進していることを発表した。

③ 「ひまわり支援学校のキャリア教育について」—高等部の進路指導の実際—

県立日向ひまわり支援学校 刀塚 ちずる 教諭

日向・東臼杵圏域に唯一の特別支援学校である日向ひまわり支援学校の進路指導について、卒業生Aさんのケースを例に、在学中の障がい福祉サービス利用、進路相談、モニタリング会議、移行支援ネットワーク会議の流れを通して発表した。専門的な用語集を資料として付けてあり、理解が進んだ。

また、小学部・中学部・高等部の発達段階に沿ったキャリア教育についての説明を踏まえ、特に高等部における産業現場における実習や高等部進路相談、進路講話、保護者への情報提供の実際について紹介した。

「職業適性」を考える上で、基盤となる「健康管理・日常生活管理・対人スキル・基本的労働習慣」を表現した図「職業準備性のピラミッド」（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構より）は、特別支援教育のみならず、児童・生徒の自立を考える上で広く理解しておきたい内容だった。

(2) 講演

【演題】 自立と社会参加のために、学齢期の支援に必要なこと

—強度行動障害の予防の観点から—

【講師】 独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園

事業企画局 研究部 部長 日詰 正文 氏

(元 厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部 精神・障害保健課 発達障害対策専門官)

講師の日詰正文氏は、長野県精神保健センター（併設の発達障害者支援センター）に勤務されていた頃から当事者や保護者の思いに寄り添って、関係機関との連携を生かし、障がいのある方々の支援に取り組まれていた。その頃の具体的なエピソードの紹介や、国の制度や施策を整え、全国への啓発を推し進めて来られた厚労省発達障害対策専門官時代のお話を柔らかな語り口でわかりやすく話された。午前中の3名の発表とリンクさせた内容に触れ、本大会をまとまりのある形に整えてくださった。

現在、「強度行動障害」と呼ばれる方々の支援について研究し、発信される立場で、特別支援教育への様々な示唆を与えてくださった。具体的には、健康の問題、自分の体の不調を伝えること、医療にかかる練習など、大人になってから必要な行動を身に付けているかどうかは、就学の頃の言語発達とは比例していないということを示された。未学習・誤学習の結果としての行動をどう変えていけばいいか、失敗やうまくいかない出来事に対して、どう行動していけばいいかを学校で練習できることを伝えていただいた。

当事者の見せている行動の背景を整理して理解することで、本人が大切に思っていることや人などのアプローチの方法を変えた例、本人の自己理解を進め「自覚はかっこいい」と考え方を変えたり、「〇の台本」で練習したりしたケースの紹介もあった。

成果を上げた実践に共通する要素として、構造化された環境・医療との連携・リラックスできる環境・一貫した対応ができるチーム作り・自尊心を持ち一人でできる活動を増やすこと・地域で継続的に生活できる体制づくりなどを挙げられた。関わる支援者、大人のチームワークの問題も大きいので、支援を振り返るための続けやすい記録の工夫も大事だというお話もしていただいた。